様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月 ２０ 日現在

機関番号：１３８０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2016
課題番号：２６３８１３１７

研究課題名（和文）自閉症スペクトラム圏大学生への大学適応を促進する多角的支援法の開発

研究課題名（英文）Developments of various programs for studnets with autism spectrum disorder to protmote adjustment

研究代表者
古橋　裕子（Furuhashi, Yuko）

静岡大学・保健センター・教授

研究者番号：４０３７７７２６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：自閉症スペクトラム障害圏学生は正常知能であるにもかかわらず、コミュニケーション等の障害により大学で不適応となりやすい。本研究は自閉症スペクトラム圏学生の実態調査を通して、不適応を改善するための支援プログラム開発とその効果の検証を目的とする実践研究である。本研究の結果ソーシャルスキルトレーニングや認知行動療法を取り入れたグループワークは抑うつ感、不安感、自己評価の改善について有効であると示唆された。

研究成果の概要（英文）：Autism spectrum disorder　(ASD) is charaterized by significant impairment in social interaction, verbal and nonverbal communication deficits, and restricted and repetitive intersts and behavior.　This study aimed to examine the effectiveness of group therapy,　which　was　designed　to　enhance　university-related　behavior,　based　on　their　specific　social communication and emotional needs.　The results showed significant post intervention improvements in depressive symptom, anxiety,　and　self-seteem.　These results indicated　that　the　group　therapy　was　effective　for　university students　with　high-functioning ASD.

研究分野：精神医学

キーワード：自閉症スペクトラム　大学生　支援

１．研究開始当初の背景

近年大学は全入学時代を迎え、学生の多様化が指摘され特に自閉症スペクトラム障害圏学生の支援の必要が指摘されている。平成 14 年度の文科省の調査では通常の学級において約６％の割合で自閉症スペクトラム障害の児童が在籍している可能性が報告され、大学でも同様の割合の自閉症スペクトラム障害圏学生が存在している可能性が示唆されている。現在のところ学生本人が自閉症スペクトラム障害の診断を受け障害受容を経て大学に入学することは少なく、小児期に診断される例は限られており、小児期には症状が目立たず青年期・成人期になって環境や周囲の対応の変化に対し、適応上の問題を呈し、引きこもりや適応水準の低下をきたす例が多い。しかも青年期以降に対人関係上の問題や不適応を経験することにより自己評価が低下し、うつ状態等の二次障害につながることが指摘されている。平成 17 年 4 月 1 日に施行された発達障害者支援法により大学でも修学支援が求められることとなった。しかしキャンパスでのサポートの重要性が指摘されているものの自閉症スペクトラム障害圏大学生への支援は学生相談担当者を中心に試行錯誤の中で行われているのが現状である。自閉症スペクトラム圏の学生ではその病理は正常との連続性の中にあるが、偏りが一定の水準を超えるとそれは現実の日常生活の中では質的に明白な実体的障害となる。当事者自身の特性としての偏りと大学環境との関係での障害の現れを区別することは容易ではないが、適切な支援を計画するためには本質的な特性の把握と大学で不適応を起こす状況の把握を可能な限り試みることが重要である。したがって自閉症スペクトラム圏学生の大学で支援には従来の個別カウンセリングに加えて社会適応力の向上、適切な感情表、問題解決能力のスキル向上等を目的とする介入工夫が必要となっている。

２．研究の目的

本研究では自閉症スペクトラムと正常との間に明らかな境界がある訳ではないため自閉症スペクトラム障害の診断基準を満たしてはいないが、その特徴が部分的に認められ、何らかの支援・介入が必要と思われる学生を自閉症スペクトラム障害圏学生とした。自閉症スペクトラム圏学生においては自尊心の低下や不安・抑うつ状態などの二次障害が不登校や退学といった修学不適応状態の原因の一つとなっている。本研究では大学入学後に自閉症スペクトラム障害圏と判明した学生の二次障害を予防し、修学不適応状態への効率的な支援方法の開発とその効果の検証を目的とする。

３．研究の方法

本研究では 2004 年 4 月から 2013 年 3 月までに保健センターを受診した自閉症スペクトラム障害圏学生の事例分析、および教職員への質問紙を用いた自閉症スペクトラム障害圏学生の学内の不適応状況について調査する。これらの事例分析と実態調査により、自閉症スペクトラム障害圏学生が不適応を起こしやすい条件を詳細に分析し、これらの分析に基づいた不適応状態への効率的な支援プログラム開発とその効果の検証を実施した。

静岡大学保健センターにおいて 2004 年 4 月から 2013 年 3 月までに介入した自閉症スペクトラム障害圏学生の事例分析を行った。また、2014 年 7 月～9 月において静岡大学の全教員にアンケートを実施し、教員の立場からみた自閉症スペクトラム障害圏学生がどのような修学状況でつまずきやすいのか検討し、支援プログラムに取り込んだ。この支援プログラムは個別ではなくグループで実施することを目的とした。

自閉症スペクトラム障害圏学生に対して基礎資料を基に修学状不適応を起こしやすい状況を特定して、その状況に即したソーシャルスキルトレーニングや認知行動療法を基盤としたプログラムを作成し実施した。具体的にはグループワークは原則月 2 回、1 回 80～90 分程度とした。グループワークの始まりと終わりには小ミーティングを実施した。この小ミーティングでは連絡事項の伝達の他、プログラム開始と終了時に各自が一言挨拶を述べることにした。グループワークの構成は表 1 に示す。グループワークで実施したプログラムはソーシャルスキルトレーニング、アサーショントレーニング、認知行動療法などの技法を取り入れたプログラムとレクレーション（ゲームやスポーツ）プログラムの 2 種類である。レクレーションプログラムも盛り込んだ理由は、遊びの要素を取り入れることでいわゆるドロップアウトを防ぐこととゲーム等を通してグループ内の交流を円滑にするためである。

プログラムの実施内容は表 2 に示す。表 2 に示す通り、認知行動療法の手法である心理教育、行動分析、認知再構成、行動活性化の技法を取り入れたプログラムとした。このプログラムは自閉症スペクトラム圏学生が自分の感情に気づき理解を深める事、感情のコントロールのやり方を身に着け、実際の学生生活に近い状況で練習する事、実際の学生生活で起こりやすいトラブルについての初動的な対応を身につけ、練習するという 3 つの目的で構成した。また、プログラムで取り上げるスキル獲得の目標瀬設定は①少しはできそうだと学生が思えること、②やっていたいと思えること、③自己効力感を高められること、④スモールステップ等に留意し、グループ内であるが、個人の主体性に合致した目標行動の設定とした。

グループワークの運営は精神科医とカウンセラーの 2 名が担当したが、レクレーショ

ンプログラムには、精神科医やカウンセラー以外に看護師や自閉症スペクトラム圏ではない（ピアサポーター）学生が参加した。グループワークを実施する際には、日時と場所、プログラムの内容を記載した 12 回分の予定表を参加学生に手渡し、構造化に留意した。プログラム実施においては言葉による説明だけではなくホワイトボードやワークシートを用いて視覚的に提示するような工夫をした。

	時間	内容
小ミーティング	10-15 分	挨拶・伝達事項
プログラム	60 分	プログラム
小ミーティング	10-15 分	挨拶・掃除・後片付け等

表１．　グループワークの構成

セッション１	セッション 7
自閉症スペクトラムについて	ゲーム
セッション 2	セッション 8
ゲーム	不安について
セッション 3	セッション 9
リラクゼーションの方法	怒りのコントロール
セッション 4	セッション 10
気分のモニタリング	うつについて
セッション 5	セッション 11
ウォーキング	問題解決方法
セッション 6	セッション 12
自分の気持ち･考えを伝える方法	まとめ

表 2.　プログラムの内容

2014 年 10 月から 2017 年 3 月までの 2.5 年間合計 5 クールのデータを解析し、自閉症スペクトラム障害圏学生が不適応を起こしやすい状況に特化したプログラムの有効性を検討した。

４．研究成果

(1)　事例分析について

2004 年 4 月から 2013 年 3 月の期間保健センター精神保健部門利用者の中で①大学入学後 ASD と診断された学生、②2013 年 3 月までに卒業もしくは退学した学生、以上 2 つの条件を満たす 24 名を対象に調査した。

24 人の概要は表 3 に示す。

センター初診年齢	20.2 歳(18～23)
男性：女性	13 人:11 人
大学入学前不登校歴	4 人
大学入学前被いじめ歴	8 人
理系：文系	15 人:9 人
留年・休学歴	20 人
卒業：退学	14 人:10 人

表 3.　保健センター受診 ASD 学生概要

保健センター初診時相談経路は①指導教員もしくは教科担当教員から紹介されたものが 9 名、本人自ら訪れた者が 10 名、保護者が連れてきたものが 3 名であった。3 分の 2 以上は教員・保護者に連れられて受診に至ったものであるが、何らかの問題を感じ自ら受診した者も 3 割以上存在した。

問題行動が顕在化した学年は表 4 に示す。

学年	人数
大学 1 年	11 人
大学 2 年	７人
大学 3 年	2 人
大学 4 年	3 人
修士 1 年	1 人

表 4.　問題が顕在化した学年

表 4 に示すように保健センター受診となる契機となる躓きは 24 名中 11 名と大学 1 年時に多くみられた。発達障害の特徴は後方視的に見ると入学後すでに様々な場面で認められていた。保健センターを初診した学年を表 5 に示した。

学年	人数
大学 1 年	2 人
大学 2 年	5 人
大学 3 年	12 人
大学 4 年	4 人
修士 1 年	1 人

表 5.保健センター初診学年

表 5 に示すように保健センター初診は大学 3 年時が半数と最も多く表 2 と比較して問題顕在化から受信までは 1 年～2 年の期間が存在することが示された。

保健センター初診時併存した症状については表 6 に示した。

症状	人数
抑うつ状態	12 人
自傷行為（リストカット・抜毛等）	8 人
暴言・暴力	3 人
過食・嘔吐	3 人
過呼吸	2 人
睡眠障害	3 人
夜尿	1 人

表 6.併存症状

表 6 に示すように併存した症状としては抑うつ状態が最も多かったが自傷行為も 4 割の割合で認められ、内容もリストカット、抜毛、体の一部を壁などにぶつける、噛む、刺す、手の皮をむしるなど多岐にわたった。24 例について卒業した学生と退学した学生を比較したところ初診時年齢及び性別には有意差はなかったが、単身生活学生の割合および問題顕在化から受診までの期間において有意差が認められた。卒業ということが予後のすべてを表現する訳ではないが、ASD 学生において単身生活であると生活リズムが保てず卒業に至らない事、やはり問題顕在化から初

診までの期間に有意差があり早期に診断し介入する必要性が示唆された。

(2)　プログラム作成・実施・有効性の検討について

2014年10月から2017年3月までの2.5年間で5クールのグループワークを実施し、11名の学生が参加した。

1クール12回のセッションで8回以上参加できた学生は8名で完了群とした。残りの3名は平均 1.7 回の参加であり、脱落群とした。グループワークを始める前(0 週）と終了時(24 週)に全般的全般印象重症度として Clinical Global Impression Severity (CGI-S)，抑うつ状態の尺度として Beck Depression Inventory (BDI)，不安状態の尺度として State Trait Anxiety Inventory (STAI、 Trait-STAI:特性不安、State-STAI：状態不安)、自己尊重感の尺度として Rosenberg Self-Esteem Inventory (RSES)を実施した。完了群と脱落群の比較を表3に示した。表7に示した通り完了群と脱落群において年齢、性別、CGI-S 、BDI、 STAI、 RSES の平均値には有意差はなかった。

	完了群	脱落群
人数（人）	8	3
性別(男：女)	5：3	2：1
年齢（平均）	21.0	21.3
CGI-S（平均）	3.25	3.0
BDI（平均）	12	11.3
特性不安（平均）	62.0	63.3
状態不安（平均）	63.5	64.3
RSES（平均）	11.0	11.3

表7.　完了群と脱落群の比較

グループワークにおいて8回以上セッションを参加した 8 名について 1 クール開始時（0 週）と 12 セッション終了時　（24 週後） CGI-S 、BDI、 STAI、 RSES を実施しその平均値を比較した（表8)。脱落群の学生3人全員呼び出しの連絡に応じない、または休学、退学という経過となったため介入から 24 週後の CGI-S、 BDI、 特性不安、状態不安、RSES の実施はできなかった。

	0週	24週後
CGI-S	3.25	3.0
BDI（平均）	12.0	8.5
特性不安（平均）	62.0	61.5
状態不安（平均）	63.5	56.5
RSES（平均）	11.0	13.25

表8.　プログラム開始前と終了後の比較

グループワークを完了した群では、BDI、状態不安、RSES 値において 0 週と 24 週後では有意差があったが、特性不安、CGI-S 値には有意差はなかった。

以上の結果から大学入学後に自閉症スペクトラム障害圏と判明した学生において、グループワークは抑うつ感や状態不安の改善及び自己尊重感を高める効果があることが示唆された。また、グループワーク終了時に各学生に個別面接を設定し、各種評価尺度を実施するとともにグループワークの感想も尋ねた。その結果 8 人全員がグループという形式が「良かった」と述べ、また、「自分と同じ事で悩んでいる人もいるのがわかった」、「他の人のやり方が参考になった」と述べていた。幼児期から児童期にかけて孤立していることを気にすることもなく、むしろ孤立を好む傾向にある自閉症スペクトラム圏の人もいわゆる青年期となると友人や恋愛対象を求めることは自然であろう。しかし一般的に高機能の範疇にある学生であっても対人交流をスムーズに進めるスキルは不十分である。定型発達の学生が持つような対人関係を目標とすることは現実的ではない。大学の中で対人希求がありながら孤立感を深めていた自閉症スペクトラム圏学生において、構造化された空間で自分と同様の特徴もつ他の学生と交流することは不安感の軽減や抑うつ感の改善につながったといえる。

本研究では小規模であること、いわゆるコントロール群がなく RCT(Randomized Controlled Trails)ではないこと、グループワーク終了後のフォローアップデータがないこと、27%（11 人中 3 人）と脱落率が高い事などの問題点があり、今後の課題としたい。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　10　件）

1.Yuko Furuhashi Group Therapy for Japanese University students with Autism Spectrum Disorder. 査読あり Psychology, 771-780, 2017

2. 古橋裕子、里村澄子、他　大学入学後に顕在化した発達障害圏学生の学業転帰　査読なし CAMPUS HEALTH 54(1)、455-456、 2017

3.Yuko Furuhashi Group training program for university students with autism spectrum disorder. 査読あり Journal of Emergency Mental Health and Human Resilience, 64. 2016

4.古橋裕子、加治由記、他　大学入学後に自閉症スペクトラムと診断された自験例の検討　査読なし CAMPUS HEALTH 53(1)、409-410 2016

5.太田裕一、太田祐子、古橋裕子、里村澄子、他　5 年間の学生相談利用学生の転帰調査 査読なし CAMPUS HEALTH 53(1)、402-403、2016

6.舟津碧、前堀洋子、加治由記、野上愛里子、古橋裕子、太田裕一、山本裕之 定期健康診断におけるメンタルヘルス面談者選定方法

についての検討　査読なし CAMPUS HEALTH 53(1)、313-315, 2016

7. Yuko Furuhashi, Msaya Ishikawa Adult onset cerebral X-linked adrenoleukodystrophy in 18 cases. 査読あり Health, 723-728, 2015

8.古橋裕子、加治由記、松本百合子、野上愛里子、山本こず恵、他　大学生の長期不登校についてー自験例 51 例の検討ー　査読なし CAMPUS HEALTH 52(1)、347-348, 2015

9.太田裕一、太田祐子、古橋裕子、里村澄子、山本裕之、他　障害学生修学支援における学生支援機関と学部の連携について　査読なし　CAMPUS HEALTH 52(1)、412-414, 2015

10.Yuko Furuhashi Hikikomori in Japanese University students: A case study of 38 Hikikomori patients.査読あり Pluralism in Psychiatry, 127-130, 2014

〔学会発表〕（計　8　件）
1.Yuko Furuhashi: Group therapy for university students with Autism spectrum disorder. International Congress of Clinical and Health Psychology on Children and Adolescents 2016.11.17(Barcelona, Spain)

2.古橋裕子、里村澄子、その他「大学入学後に顕在化した発達障害圏学生の学業転帰」第 54 回全国大学保健管理研究集会 2016.10.6（大阪府、大阪国際会議場）

3.Yuko Furuhashi, et. al: Group training program for university students with autism spectrum disorder. 2ed International Conference on Mental Health and Human resilience 2016.7.15(Cologne, Germany)

4.Yuko Furuhashi Group therapy for university students with Autism spectrum disorder. 24th Congress of European psychiatry association 2016.3.14 (Madrid. Spain)

5.古橋裕子、その他「大学入学後に自閉症スペクトラムと診断された自験例の検討」第 53 回全国大学保健管理研究集会 2015.9.10 (岩手県、盛岡市民文化ホール)

6.Yuko Furuhashi, et.al: Group therapy for university students with ADHD. 5th World Congress of ADHD 2015.5.31 (Glasgow, UK)

7.Yuko Furuhashi, et.al: Hikikomori in Japanese University Students. 16th World Congress of Psychiatry 2014.9.14 (Madrid, Spain)

8.古橋裕子、その他「大学生の長期不登校についてー自験例 51 例の検討ー」第 52 回全国大学保健管理研究集会 2014.9.4(東京都、慶應義塾大学)
(52 回全国大学保健管理研究集会優秀演題を受賞した)

〔図書〕（計 2　件）
1.Advances in Psychology Research Alexsndra M. Columbus 編集　分担執筆 (Chapter 9 担当) Yuko Furuhashi,Shusuke Furuhashi. 167-178, Nova Science Publishes, New York 2017

2. Autism Spectrum Disorder: Early Signs, Intervention Options and Family Impact Arlene Valdez 編集　分担執筆　Yuko Furuhashi, Shusuke Furuhashi. The effect of group cognitive behavior therapy on adults with high-functioning autism spectrum disorder, 103-127, Nova Science Publishes, New York 2015
〔産業財産権〕

○出願状況（計　0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
古橋　裕子（FURUHASHI, Yuko）
静岡大学・保健センター・教授
研究者番号：40377726

(2)研究分担者
　なし

(3)連携研究者

なし

(4)研究協力者
なし